西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

――緊急発掘調査報告――

眼子田原遺跡

MANAKODAWARA SITE

1977

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

序

ここに述べる眼子田原遺跡の所在する沢渡地区を含めた，伊那市西春近地籍はここ数年来大きな開発事業が行なわれつつあります。その主なものとしては，中央高速自動車道路，大規模農道，西部開発に関連する圃場整備事業であります。

このような開発は，時代の要請でありますが，埋蔵文化財保護にとっては喜ばしい姿ではありません。現代の開発と文化財保護との関係は矛盾する問題が数多く潜んでいますので，早急に解決してもらいたい問題の１つです。

眼子田原遺跡は，昭和５１年度西部開発事業計画に該当しており，発掘調査は昭和５１年１０月から同年１１月上旬にかけて行なわれました。その結果は報告書に述べられているようです。

最後に，発掘調査に際しては，深いご理解をいただいた南信土地改良事務所職員一同，団長，友野良一氏，調査員各位，作業員の皆様に対し，深甚な謝意を表する次第であります。

昭和51年11月25日

伊那市教育委員会

教育長　松　沢　一　美

凡　　例

1. 今回の発掘調査は西部開発に伴なう，県営畑地帯総合土地改良事業で，第４次緊急発掘調査にもとずく報告書とする。

2. この調査は，県営畑地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で，国・県・市の補助金のもとに，事業は長野県南信土地改良事務所の委託により，伊那市教育委員会が実施した。

3. 本調査は，昭和５１年度中に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし，資料の再検討は，後日の機会にゆずることにした。

4. 本文執筆者は，次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

小　池　政　美，　田　畑　辰　雄，　荻　原　　茂

◎図版作製者

○遺構および地形

友野良一，小池政美，田畑辰雄，荻原　茂

◎土器実測図

友野良一，小池政美，田畑辰雄，荻原　茂

◎写真撮影

◎発掘及び遺構

友野良一，小池政美，田畑辰雄

5. 本報告書の編集は主として，伊那市教育委員会があたった。

目　　次

序
凡　例
目　次
挿図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　環　境 …… (1～3)

第1節　位　置 …… (1)
第2節　地形・地質 …… (2)
第3節　周辺遺跡との関連 …… (2)

第Ⅱ章　発掘調査の経過 …… (4～7)

第1節　発掘調査の経緯 …… (4)
第2節　調査の組織 …… (4～5)
第3節　発掘日誌 …… (5～7)

第Ⅲ章　遺　構 …… (8～15)

第1節　住居址 …… (8～11)
第2節　土　拡 …… (11～13)
第3節　溝　址 …… (14～15)

第Ⅳ章　遺　物 …… (16～18)

第1節　土　器 …… (16～17)
第2節　石　器 …… (17)
第3節　鉄　器 …… (18)

第Ⅴ章　まとめ …… (19)

挿入図目次

第１図　位置及び遺跡分布図 …… （１）
第２図　地　形　図 …… （３）
第３図　遺構配置図 …… （８）
第４図　第１号住居址実測図 …… （９）
第５図　第２号住居址実測図 …… （10）
第６図　第３号住居址実測図 …… （11）
第７図　第１号・２号土拡実測図 …… （12）
第８図　第３号・４・５号土拡実測図 …… （12）
第９図　第６号土拡実測図 …… （13）
第10図　第７・８号土拡実測図 …… （13）
第11図　Ⅰ区溝址実測図 …… （14）
第12図　Ⅱ区溝址実測図 …… （14）
第13図　Ⅲ区溝址実測図 …… （15）
第14図　土器実測図 …… （17）
第15図　鉄器実測図 …… （18）

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… （２）
第２表　出土土器の形状一覧表（その１）…… （16）
第３表　出土石器の形状一覧表（その１）…… （17）

図版目次

図版１　遺跡全景
図版２　遺　　構
図版３　遺構及び遺物出土状況
図版４　遺　　構
図版５　遺　　構
図版６　遺　　構
図版７　出土土器
図版８　出土石器

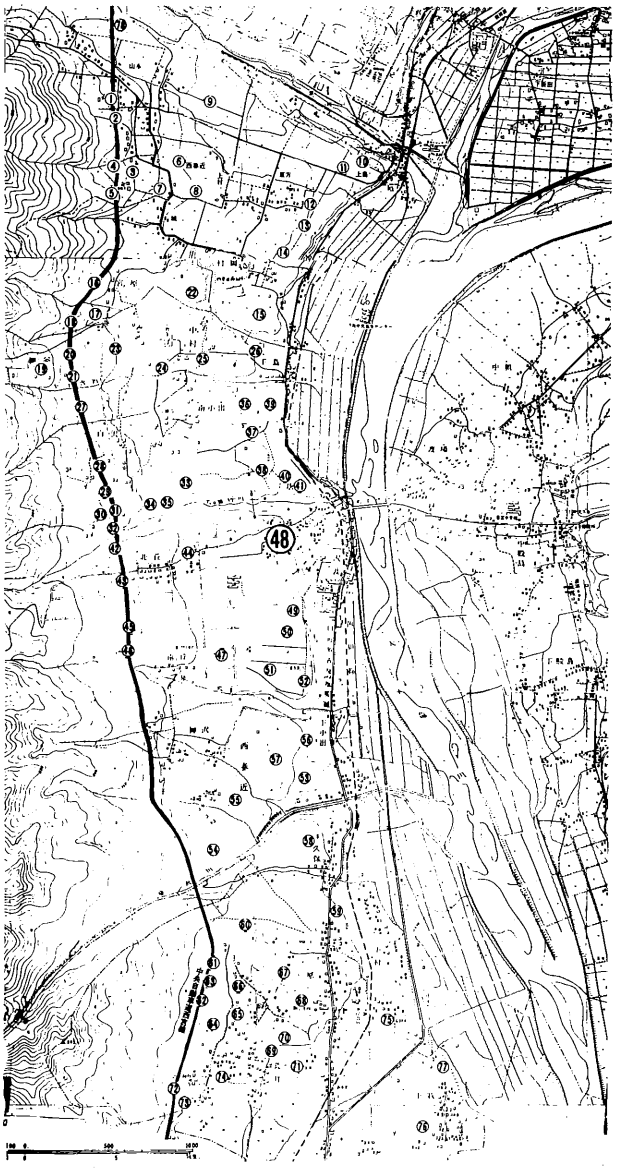
第 I 章　環　　境

第1節　位　　置

眼子田原遺跡は，長野県伊那市西春近沢渡地区に所在している。伊那市街より遺跡までに至る道順は次の通りである。まず飯田線沢渡駅で降り，西方へ 300 m 程行くと第一段丘につきあたる。これを登りつめた平担面が遺跡地で，犬田切川と伊那女子高校とではさまれた地点である。

遺跡の名称

1	城平上	40	唐木原
2	城　平	41	唐木古墳
3	常輪寺	42	北丘 B
4	宮　林	43	北丘 A
5	山の根	44	北丘 C
6	山　本	45	南丘 B
7	常輪寺下	46	南丘 A
8	上　村	47	南丘 C
9	北　条	48	**眼子田原**
10	上島下	49	山の神
11	上　島	50	上の塚
12	東方 B	51	沢渡南原
13	東方 A	52	下小出原
14	村岡北	53	天伯原
15	村岡南	54	南　村
16	大　境	55	東　田
17	中　原	56	天　伯
18	百　刈	57	下小出原
19	西垣外	58	井の久保
20	細ケ谷 A	59	表木原
21	細ケ谷 B	60	山の下
22	小出城	61	菖浦沢
23	宮ノ原	62	富士山下
24	浜射場	63	富士塚
25	中　村	64	広垣外 1
26	中村東	65	広垣外 2
27	山寺垣外	66	鳥井田
28	白沢原	67	高遠道
29	名　廻	68	西春近南小学校附近
30	名廻西古墳		
31	名廻東古墳	69	安岡城
32	名廻南	70	城の腰
33	児　塚	71	横　吹
34	鎮護塚西古墳	72	和　手
		73	上手南
35	鎮護塚東古墳	74	宮入口
		75	寺　村
36	カンバ垣外	76	下　牧
37	丸　山	77	下牧経塚
38	南小出南原		
39	薬師堂		



第2節　地形・地質

伊那谷に一般的に通ずる地形は西に　中央アルプス，東に南アルプス，その前山である伊那山脈とにはさまれた南北に細長い盆地状地形を呈している。中央の最低部に源を諏訪湖に持つ天龍川が流れ，一般的によばれている縦谷状地形を成している。さらに本流である天龍川の両岸には数多くの小河川があり，それらによって形造された大小の扇状地，河岸段丘，渓谷が展開している。

伊那市附近では小沢川，三峰川，小黒川が主たる河川であり，これらは同様に大きな段成や扇状地を形成した要因となっている。

本遺跡地は南北に流れる天龍川と西から東へ流れる犬田切川とが直角状に接する段丘突端部に広がっている。最後に遺跡の立地条件に極めて密接な関係をもつ犬田切川に焦点を合せてみようと思う。犬田切川は権現山を源とし，西から東へ流れて天龍川に合流する川で，伊那市西春近地区に於いては，北部の小黒川，南部の藤沢川に肩を其べることのできる川である。水量は通常は，割合に少なめであるが，一たん雨が降ると増水が著しく，近年，砂防ダムができるまでは下流は洪水の危険にしばしば悩まされた。この附近の名称より田切地形と何んらかの関係があると推定ができるのではないか。

岩石の点から考えてみると，木曾山脈の内では極めて見事な花崗岩が産している。この花崗岩は犬田切川だけに産するもので，石垣等に利用され，極めて重宝がられている。また，本河川の流域は川ぎりの発生がひんぱんにみられる。

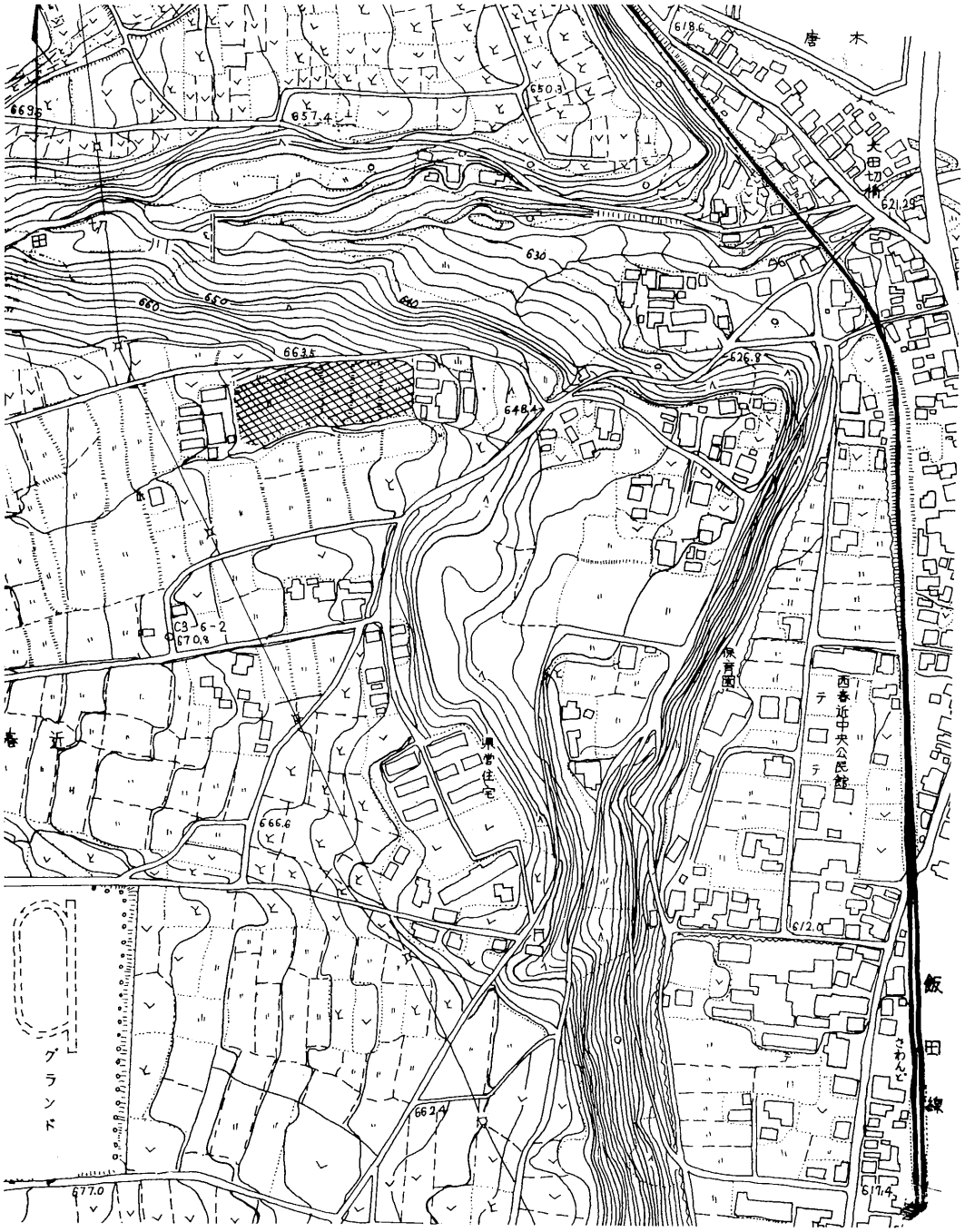
第3節　周辺遺跡との関連

眼子田原遺跡は出土遺物よ，縄文時代から江戸時代までにわたる遺跡であることが明らかになってきたが，調査区域が限定されていたので，結論づけられるような成果を穫るにはいたらなかった。そこで，ある程度，結論づけができるように犬田切川から藤沢川までの区域に分布している遺跡を時代別に表を利用してまとめてみた。

眼子田原遺跡を含めた周辺遺跡の内容は次の通りである。　（第1図参照）　（小池政美）

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生			奈良・平安			中世	備考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	灰		
43	北丘　A	木裏原					○						○				(8659)
44	北丘　C	〃					○										
45	南丘　B	〃					○						○				中央道（8666）
46	南丘　A	〃	○				○					○	○	○	○		
47	南丘　C	〃					○										
48	眼子田原	沢　渡					○										
49	山の神	〃					○						○				
50	山の塚	〃											○	○			8×10m 古墳？
51	沢渡南原	〃					○										
52	下小出平	下小出					○						○				
53	天伯原	〃					○						○	○	○		(2286)
54	南　村	柳　沢					○										住居址（8668）
55	東　田	〃					○								○		(2283)
56	天　伯	下小出					○	○									(2281)

第1表　周辺遺跡一覧表



第2図　地形図　(1：4500)

第Ⅱ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経緯

西春近地区の西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昭和４８年度の上島，東方部落，昭和４９年度の東方，村岡，城・山本部落にわたって行なわれてきました。本年度は沢渡の上段，眼子田原地区が該当し，その面積は１０ha 程でありました。

発掘調査は水田地帯のために一作収穫して秋に実施する計画を当初よりたてていました。ところが，本年度の秋は天候が不順であったために収穫が大幅に遅れて，着手は１０月下旬からになりました。西部開発（県営畑地帯総合土地改良事業）第１０工区内の遺跡の調査を委託された場合は，受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり，おって南信土地改良事務所より，緊急発掘調査について委託した旨，市教育委員会へ依頼を受けたので，市教育委員会を中心に，眼子田原遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節　調査の組織

眼子田原遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井喜夫	伊那市教育委員長
〃	向山雅重	長野県文化財専門委員
〃	木下衛	上伊那教育会会長
〃	原益久	南信土地改良事務所長
〃	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
〃	有賀武	〃　課長補佐
〃	米山彰英	〃　係長
〃	三沢真知子	〃　主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃

調査員	小池政美	長野県考古学会会員
〃	田畑辰雄	〃
〃	福沢幸一	〃
〃	辰野伝衛	〃
〃	赤羽義洋	国学院大学学生
〃	荻原　茂	東京薬科大学学生

第3節　発掘日誌

昭和51年10月27日　田畑君のところより発掘器材の運搬を行なう。午後，その器材を利用してテント設営に着手し，午後4時頃，その作業を終了する。作業終了時までには，まだ多少の時間があったので，近くの山へ入ってたきつけ用の木をあつめる。当初，発掘する場所にブルドーザーがきてくれた。

昭和51年10月28日　午前中，東側よりグリットを設定する。水田によって高低差が大きいので水田，1枚，1枚を区ごとに分けて理解できるようにした。遺跡地の中央部に東西に川が流れているが，それより北側を最初に着手し，東側よりⅠ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ区，と決めて，そのなかをさらに細分して東よりⅠ区ではA～E，Ⅱ区ではA～D，Ⅲ区ではA～G，Ⅳ区ではA～Gまでと決める。北から東にかけてⅠ区では1～16　Ⅱ区では1～10，Ⅲ区では1～16，Ⅳ区では1～15　までと決める。

昭和51年10月29日　本日よりグリット掘りを開始する。Ⅰ区のA2にかけて黒土の落ち込みがみられた。これを掘り進めていくと、溝状の水路のようなものになり以前，この地に何か用水路が存在した事実がわかってきた。附近の古老の話によって，この水田は明治の初期に開田されたものであり，その地場層の下より水路が切り込んでいることからして，水路はそれ以前のものであることが判然とした。

発掘風景

昭和５１年１０月３０日　Ⅰ区の溝状遺構はほぼ本日一日で掘り上げることができた。完掘してみたが遺物は何も出土しなかった。

昭和５１年１１月　１　日　昨日に引き続いて，グリット掘りを南側へと掘り進めていくと，８から１３ラインの範囲内に土拡８個が密集して発見された。土拡でも西側は取土の状態で壁は浅く，それに反して埋土になっていた東側は深くなっていた。

昭和５１年１１月　２　日　発見された８つの土拡のそれぞれのプラン確認と掘り下げを実施した。作業員達が割合に多数だったので，夕方までにはそれぞれの土拡がほぼ完掘された。８つの土拡はいろいろの形があったが，遺物の出土は全くみられなかった。

昭和５１年１１月　４　日　昨日，ほぼ完掘された土拡８個をほぼ完全に掘りあげた。あとは写真が撮影できるようにしておいて，シートをかけておくことにした。

昭和５１年１１月　５　日　Ⅱ地区のグリットを一つ置きに掘り進めていくと，Ⅰ地区と同じように東西に溝状の落ち込みが走っているのがわかった。遺物の出土は何もなかった。

昭和５１年１１月　６　日　Ⅱ地区の溝状遺構を完掘しようと掘り進めていくと，溝底より大きな石が配列状に並んでおり，ますます用水路への希望が明るくなってきた。

昭和５１年１１月　７　日　Ⅱ地区の溝状遺構を完全に掘りあげて，溝底に並んでいた石の洗い出しをして，写真がとれるようにシートをかけておく。

昭和５１年１１月　８　日　Ⅲ地区のグリットを掘り続けていくと，Ⅰ，Ⅱ地区に続いて，Ⅲ地区の北側にも，溝状遺構の続きがみられた。掘り進めていく途中で各所に断面を残して，あとで図ができるようにしておいた。

昭和５１年１１月　９　日　Ⅲ地区の溝状遺構を完掘して，実測及び写真がとれるようにして，シートを覆っておく，ところどころに残しておいた断面を実測する。

昭和５１年１１月１０日　Ⅲ地区のグリットを南側へ掘り進めていくと，D10～D12，E10～E12 F10～F12の範囲に黒土の落ち込みがみられ，特にF12グリットにはカマドらしい石がみられたのでこれを第１号住居址とする。プランを確認するように全面発掘をこころみる。

昭和５１年１１月１１日　全面発掘をするように全てを掘り進めていくと，プランが確認でき，隅丸方形に近い竪穴住居址となった。掘り進めていく途中では火災にあったものとみえて，多量の木炭と焼土が検出された。

昭和５１年１１月１２日　昨日に引き続いて第１号住居址を掘り下げていく。遺物の出土は少なくて，カマド内よりカキ目の土師器が発見されたにすぎなかった。

昭和５１年１１月１３日　第１号住居址の全掘をする。全掘をした結果では本住居址は平安時代のものであった。

昭和５１年１１月１５日　Ⅱ地区，Ⅲ地区，Ⅳ地区は大般全面にわたって掘り尽してしまったので，Ⅰ地区の南側の１４ライン附近を掘り進めていった。そうすると，表土層面よりわずかに下った面に焼土と木炭の混合土層があり，さらにかたい床面が発見され，住居址と判明したので，これを第２号住居址とする。

昭和５１年１１月１６日　第２号住居址は大きな住居址と考えられたので，附近のグリットを拡

張してプラン確認に全力を注ぐ，夕方までには，ほぼその全貌が把握できた。

昭和５１年１１月１７日　昨日，完全にプランの把握ができた住居址を掘り下げていくと，本住居址の覆土は黄褐色土層であり，カマドは西側にあった。覆土は掘り下げていく途中では，遺物の出土量はわずかであった。掘り下げていく途中では，西側が一段下って方形状の黒土の落ち込みがみられこれを第３号住居址とした。

昭和５１年１１月１９日　本日は，第２号住居址，第３号住居址の完掘に全力を注ぐ，遺物の出土量がほんのわずかなために，住居址の進み具合は，割合にスムーズに行き，夕方までには，ほぼ，その全体の形が明らかとなった。遺物は少量の土師器や須恵器が出土したのみであった。

昭和５１年１１月２０日　第１号土拡から第８号土拡までの実測及び写真撮影をする。

昭和５１年１１月２２日　発掘器材のあとかたづけをしたり，運搬作業をもする。第１号住居址第２号住居址，第３号住居址の写真撮影や実測をする。溝状遺構の実測は全日程を通じて行なった。さらに，全測図の作製をした。

昭和５２年１月　遺物を整理して，報告書作製に全力を注ぐ。

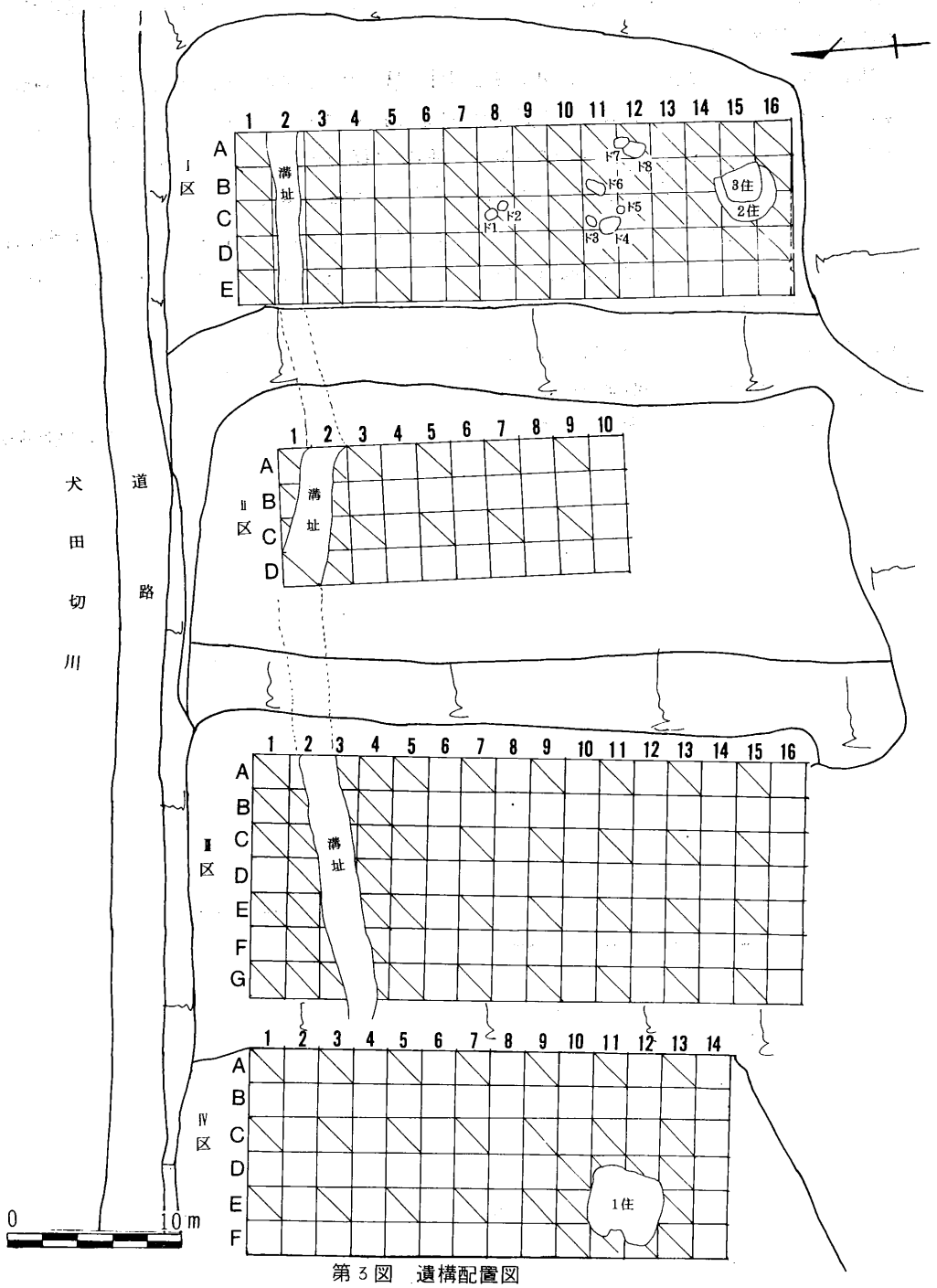
昭和５２年２月　報告書の編集を行なう。

昭和５２年２月　報告書を印刷所へ送る。

（小池政美）

第Ⅲ章　遺　　構

第1節　住居址



第3図　遺構配置図

第１号住居址　（第４図，図版２，３）

調査地の西側の第Ⅳ地区に検出された遺構である。褐色土層よりソフトローム層まで掘り込んだ隅丸方形の竪穴住居址で，その規模は南北３ｍ80cm，東西３ｍ70cm程である。壁はやや内傾に近い角度で良好，西が高くて，60cm程を測定できる。

床面は大般水平で，堅くたたいた個所が残存していた。また本址は火災にあったとみえて，南側と東北の隅のところどころに炭化した材木が床面に密着して検出された。柱穴は南側に列状に５カ所，西側に列状に３カ所，西壁に密着して２カ所が検出された。北側はわずかに１カ所，東側に２カ所発見されたにすぎなかった。

カマドは西壁の中央よりわずかに北側によった所に位置し，石組粘土カマドであり，形状は西側はややつぼまり、東側はひろがり，やや扇形状になっていた。その規模は南北65cm，東西１ｍ20cm位を算し，カマドに利用されている石は犬田切川産の花崗岩であった。

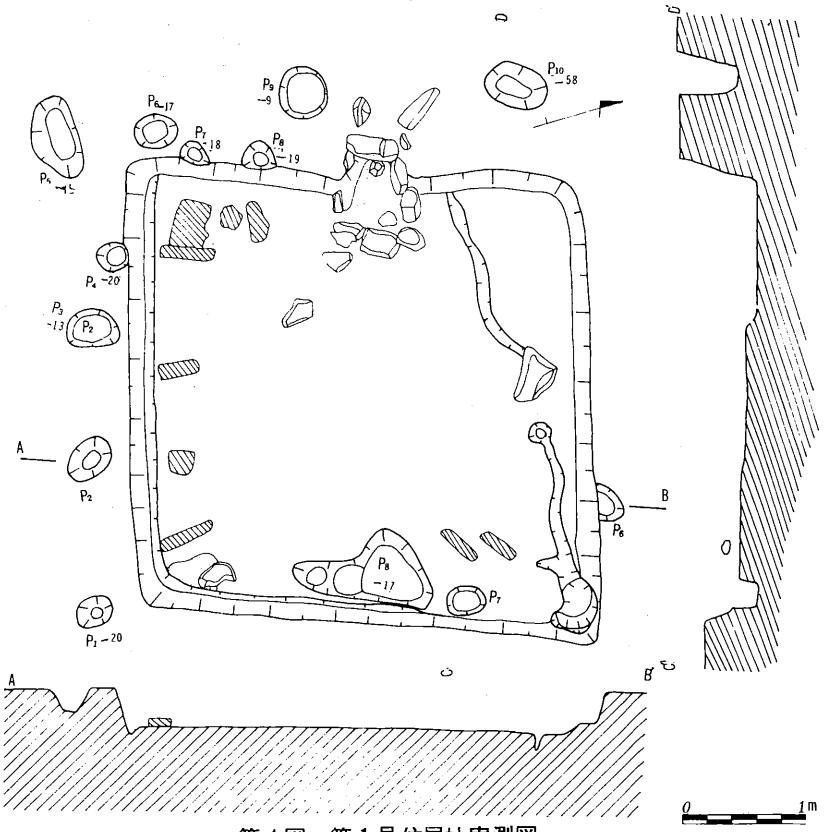
遺物はカマド内より土師器のカメが出土した。さらに床面上よりわずかに浮いて炭化物に混じって刀子が３点出土した。

第２号住居址　（第５図，図版２，３）

調査地区の東側の第Ｉ区の南側に検出された遺構である。表土層面より40cm程下ったソフトローム層面を掘り込み構築された竪穴住居址である。平面形は南側では不明瞭であった。構築当時は現存していたと思われたが水田造成のときに破壊されたものと思われる。察するに，最初のプランは隅丸方形であったものと確信できる。

規模は南北４ｍ90cm東西４ｍ65cm程を測定できた。壁は南東の一角は欠落していたが，その他は全周し，概して10cm前後を測り、内傾気味であった。

床面はローム層それ自体にタタキ状に構築され部分的には貼床状になっ



第４図　第１号住居址実測図

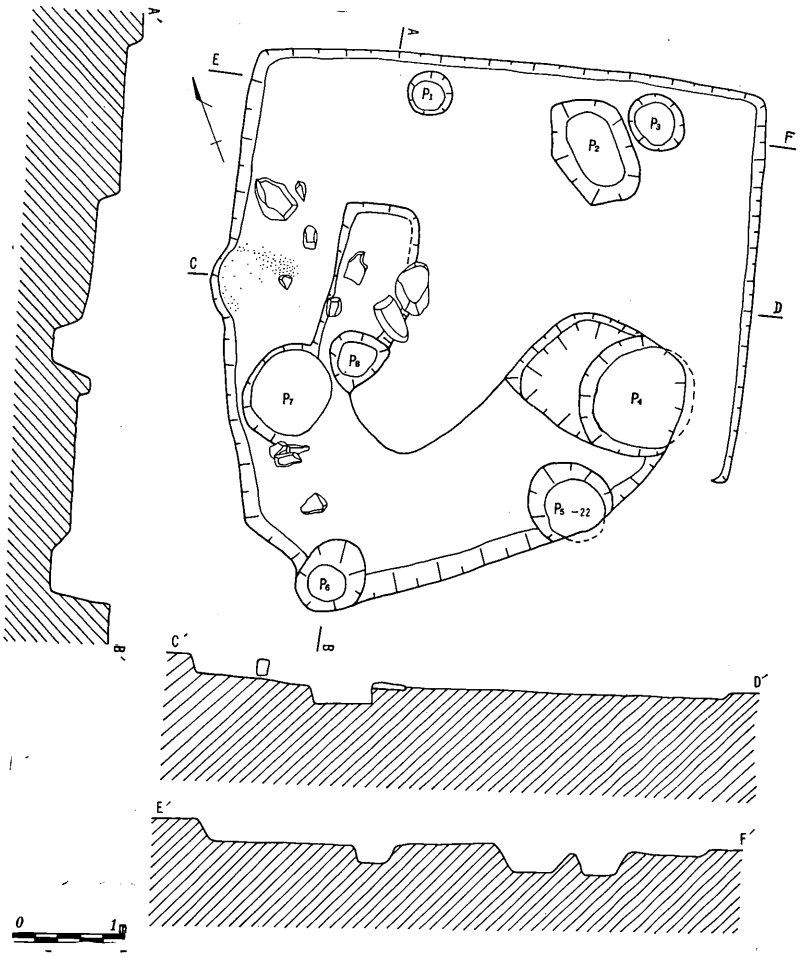
ていたところもあった。硬度はカマド周辺は極めて硬いが，他は軟弱であった。

ピットは８カ所発見されたが，柱穴として確実に生きているのはP_1，P_3，P_5，P_6，P_8，の５本であり，P_4 は形態や場所からして貯蔵穴と思われる。５カ所の柱穴の大きさを記してみると次のようになる。P_1の直径は40cm，P_3 は50cm，P_5 は70cm，P_6 は60cm，P_8 は45cm 位であった。

カマドは構築時は完全な形をとっていたと思われるが，水田造成の折に破壊されたとみえて，現在は南北１m30cm，東西１m40cm位の範囲内に８個の変成岩が散在していた。おそらく，これらの石がカマドに使用されたものであることは想像に難くない。さらにそれらの西側に焼土が検出された。これがカマドの決手になると思う。

遺物の出土は極めて少量であった。わずかに，土師器，須恵器，灰釉陶器片が出土したのみであった。

よって，本住居址は平安時代に位置づけできると思われる。本住居址より出土した遺物は実測や拓影にするのはなかったので，それらの記載は今回は割愛させていただくことにした。

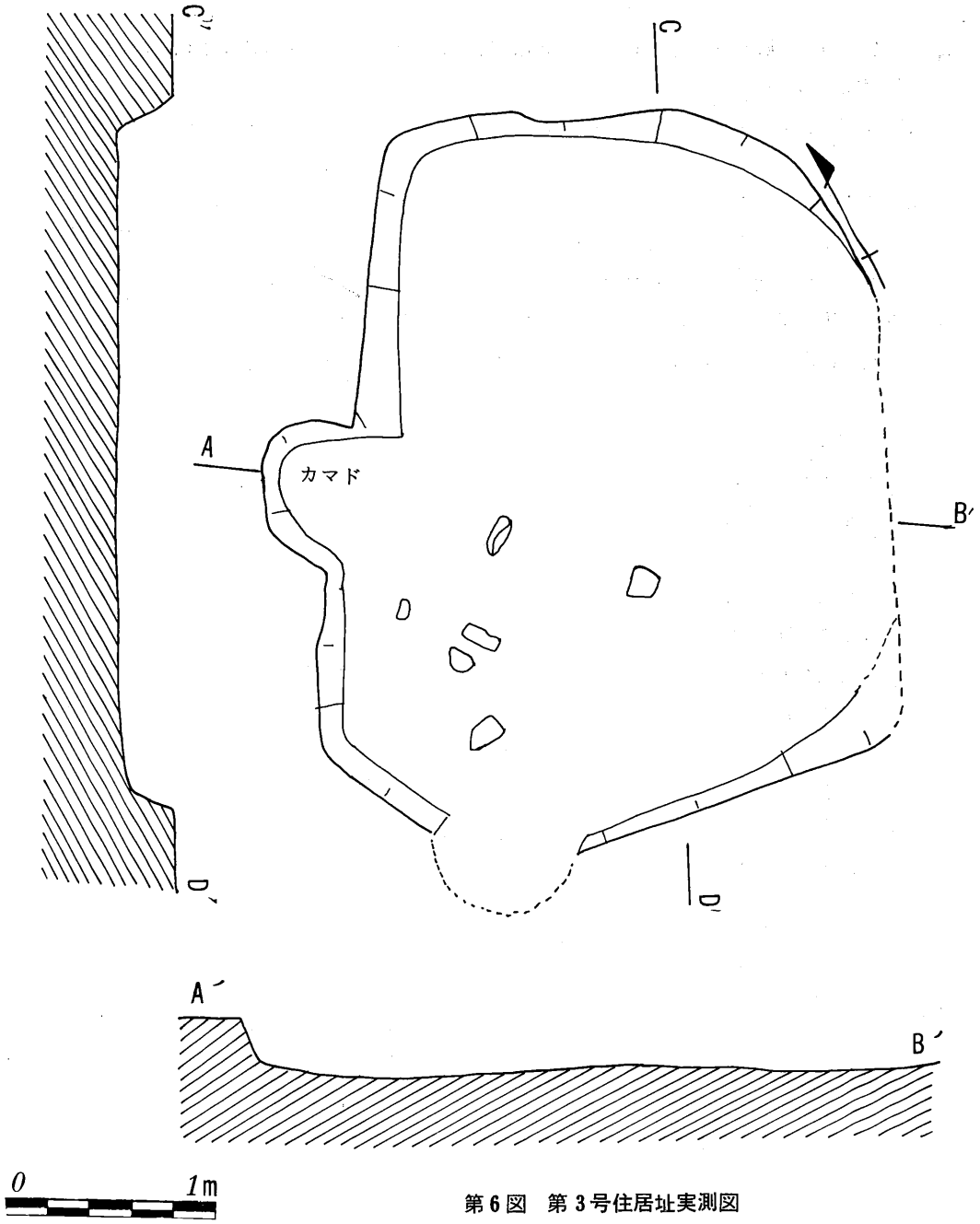


第５図　第２号住居址実測図

第３号住居址　（第６図，図版２，３）

本址は第２号住居址の貼り床を取り除いた下に発見されたものであった。その規模は南北３m40cm，東西は推定２m50cm程を測定できる。壁高は内傾や内彎し，20～40cm位の範囲内に含まれた。壁面の状態は浅いわりには良好であった。床面は極めて固く，ソフトローム層をたたいてあり，大般，水平となっていた。

床面上には住居址に必要な柱穴の存在はなかった。わずかに西側の突び出した部分にカマドに使用したらしい粘土のかたまりが存在していた。遺物は何も出土しなかった。　（小池政美）



第6図　第3号住居址実測図

第2節　土　　拡

第1号土拡　（第7図，図版4）

発掘地区の第Ⅰ区C8に位置し，その規模は南北1m30cm，東西75cm，深さ5～30cm程の長円形

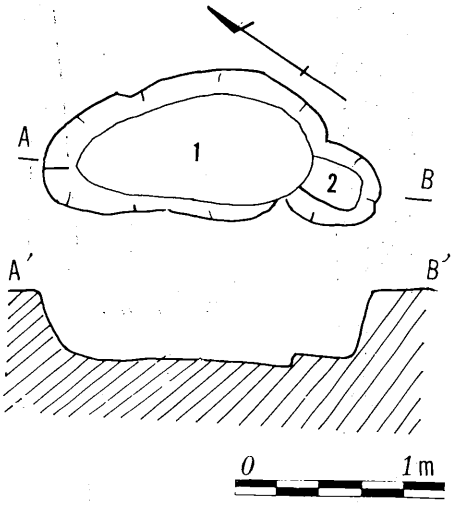
状を呈し，ローム層を掘り込んでいる。覆土は褐色土であった。壁は内彎が強く，その床面は水平で軟弱気味であった。

遺物は何も出土しなかった。ただし，覆土内よりは少量の炭化物の検出をみた。

第2号土拡　（第7図，図版4）

第1号土拡の南壁に密着したところに位置した土拡である。規模は南北40cm，東西40cm程であり，そのプランは円形状を呈し，むしろピット状のものである。壁面は内傾気味であって，その深さは30 cm程である。

床面は軟弱で，水平であった。北側で，第1号土拡に切られている。遺物は何も出土しなかった。なかより少量の炭化物の出土がみられた。



第7図　第1号・2号土拡実測図

第3号土拡　（第8図，図版4）

表土層面より35cm程下ったソフトローム層面を掘り込んだ土拡である。平面プランは円形で，規模は南北60cm，東西75cmを測定できる。壁は垂直に近く壁高は30cm前後を計える。床面はほぼ水平で，わずかなたたきがあった。

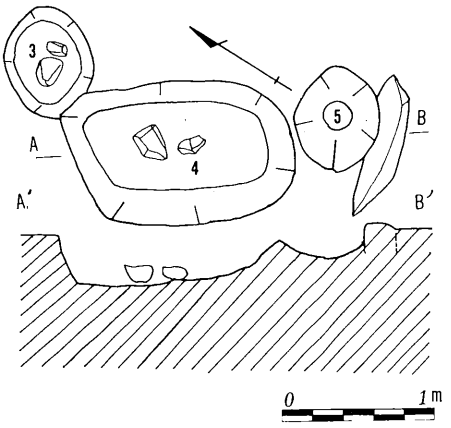
床面上の石は花崗岩であった。覆土内より遺物の出土はなかったが，わずかな焼土と炭化物を検出し，遺構であることが確証できた。

第4号土拡　（第8図，図版4）

第3号土拡の南壁を切つて構築された土拡である。表土層面より40cm程下ったローム層面を掘り込み，南北1 m50cm，東西95cm程の規模を有し，長円形プランを呈している。

壁は北側は内彎し，南側は内傾しておる。高さは20～30cm を測り，南側は凹凸が顕著であった。床面はたたきらしきものは確認できず，わずかに凹凸があった。床面中央部の石は花崗岩であった。

覆土内より多量の焼土と炭化物の検出はみたが，遺物の出土は何もなかった。本土拡は8カ所のうちで最も土拡らしい土拡はこれが唯一のものであろう土拡としては極めてよいものであろう。



第8図　第3号・4号・5号土拡実測図

第5号土拡　（第8図，図版4）

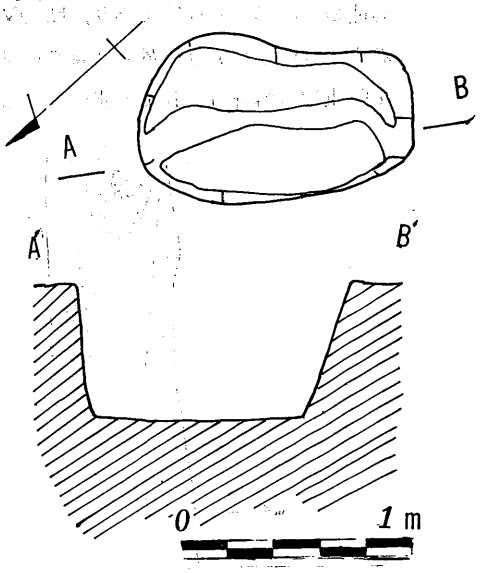
ローム層を掘り込んで構築された土拡で，その規模は南北55cm，東西60cmである。プランは円形を呈している。壁高は10数cmを測定できる。壁面状態は内彎気味である。床面はわずかにたたきになっており，中央部がすりばち状に低くなっている。南側の壁上面に変成岩が東西にあった。

覆土内より遺物は全く出土しなかったが，微量の炭化物を検出した。

第6号土拡　（第9図，図版5）

第5号土拡と第7号土拡とにはさまれて検出された土拡で南北75cm，東西1m18cm程の長円形プランを呈している深さは60cm位で，ローム層を掘り込んでいる。プランの中央部を東西に幅10cm位フラットに残された部分があった。

壁面は袋状で内傾気味を呈し，凹凸がわずかに認められたたきは存在しなかった。床面はローム層のわずかなたたきであり，覆土中より少量の炭化物が検出された。遺物は何も出土しなかった。



第9図　第6号土拡実測図

第7号土拡　（第10図，図版5）

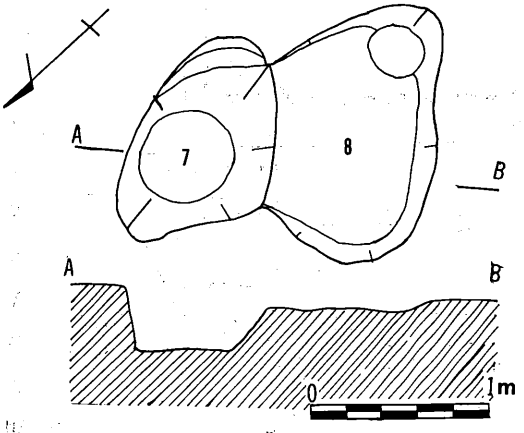
第Ⅰ区の東端近に発見された土拡である。南壁で第8号土拡を切ってつくられている。南北1m10cm，東西85cm位の角張った円形プランである。壁高は20～30cm位あり，片面は内傾が，片面は内彎が強くなっている。

床面はローム層中につくられ，かたいたたきになっており，わずかに中央部附近が高くはなっているが，全般的には大般水平であった。覆土内より少量の炭化物は出土したが，遺物は何も見あたらなかった。

第8号土拡　（第10図，図版5）

本土拡は南側が第7号土拡に切られるようなかっこうで検出された土拡である。切られているために全般的なプランは不明ではあるが，想像するに，隅丸方形に近いかっこうをとっていると思われる。壁高はわずかに数cmと思われ，軟弱であった。

床面は多少の凹凸が認められ，わずかなたたきになっていた。覆土内より少量の炭化物の検出は認められたが，遺物の確認は何もなかった。　（小池政美）



第10図　第7号・8号土拡実測図

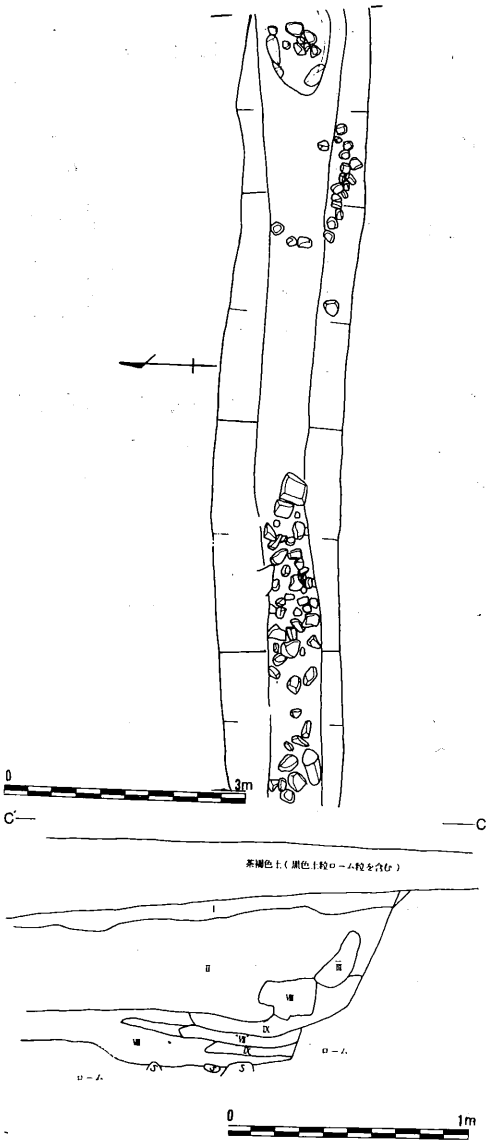
第3節　溝　　址

溝址　（第11，12，13図，図版6）

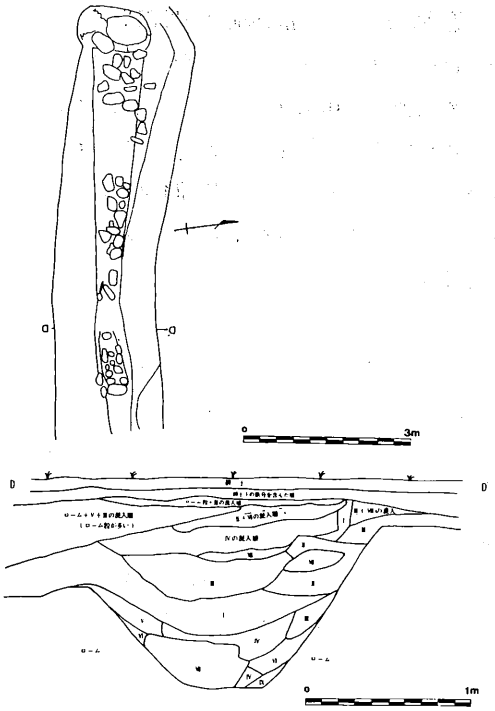
遺跡内Ⅰ区の北端から発見され，やや北に寄りながらⅡ区，Ⅲ区と続いている。

溝址の巾は150cm 前後であり，断面V字状を呈している。河床にはコブシ大から，かなり大きめの石まではいっており，砂も多量に堆積している。

Ⅰ区東端（溝址はそれより東に続くものと思われる）は一段底く，不整な長円形を呈しており、



第11図　Ⅰ区溝址実測図



第12図　Ⅱ区溝址実測図

地層（第11，12，13図ともに共通）

Ⅰ－黒色土①

Ⅱ－黒色土②（やや褐色が強い）

Ⅲ－黒色土③（②より褐色が強い）

Ⅳ－黒褐色土①

Ⅴ－茶褐色土

Ⅵ－黒褐色土②（①より褐色が強い）

Ⅶ－暗茶褐色土

Ⅷ－真黒色土

Ⅸ－砂質茶褐色土（黒色土混入）

人頭大の石が入り込んでいて，土拡状となっている。

またⅠ区の溝址の東側に，大きさが17cm前の石が，南側の壁面に貼りつけたようにあり，それが150cmの長さにおよんでいる。

Ⅰ区の溝址の深さは7～80cmくらいであった。

Ⅱ区の溝址はⅠ区から続くものであるが，検出面からの深さはⅠ区のそれよりも深くなっており，溝巾も同様に広くなっている。

溝の断面はⅠ区同様V字状を呈しているが南側の壁が，北側の壁よりも高く，傾斜も北側壁より，南側壁の方が強くなっており，河床には人頭大の石が，砂とともにはいっている。

Ⅱ区の溝址の巾は，180～200cm，深さは，110cm前後を計る。

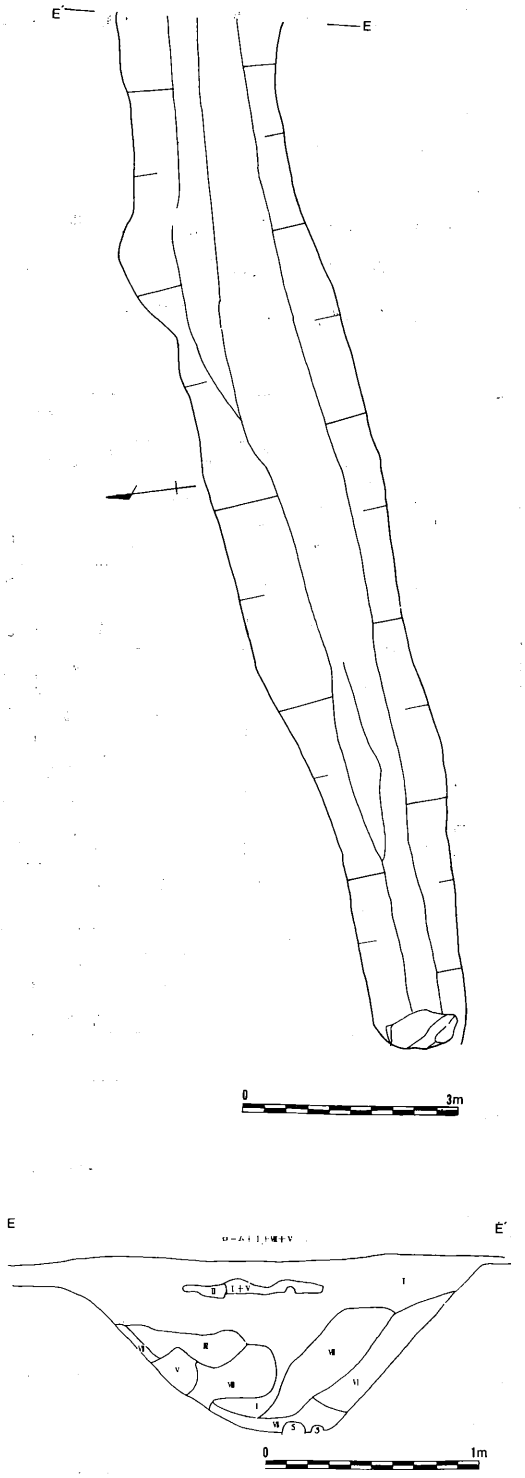
Ⅲ区の溝址もⅠ，Ⅱ区から続いているもので，方向をやや南に向けながら，これより西へ続いていると思われる。

Ⅲ区の西端に近づくと，溝巾が急に細くなり，本溝址もここで消滅するかとも思われたが，溝の深さは，浅くはなるものの，40～50cm前後はある。65×45cm大の石が，溝址内にいっぱいにはいっている。

当区の溝址の河床の傾斜は，Ⅰ，Ⅱ区に比べてかなり急なものとなっている。

溝址の巾は，東側で240cm～210cm，西側の細くなる部分で，130cm 前後を，深さは，浅いところで，40cmから深いところで75～80cmを計る。

Ⅰ～Ⅲ区の溝址ともに覆土は，第12図の下にあるとうりで，下層に行くほど，層序は混乱している。　　（田畑辰雄）



第13図　第Ⅲ区溝址実測図

第Ⅳ章　遺　物

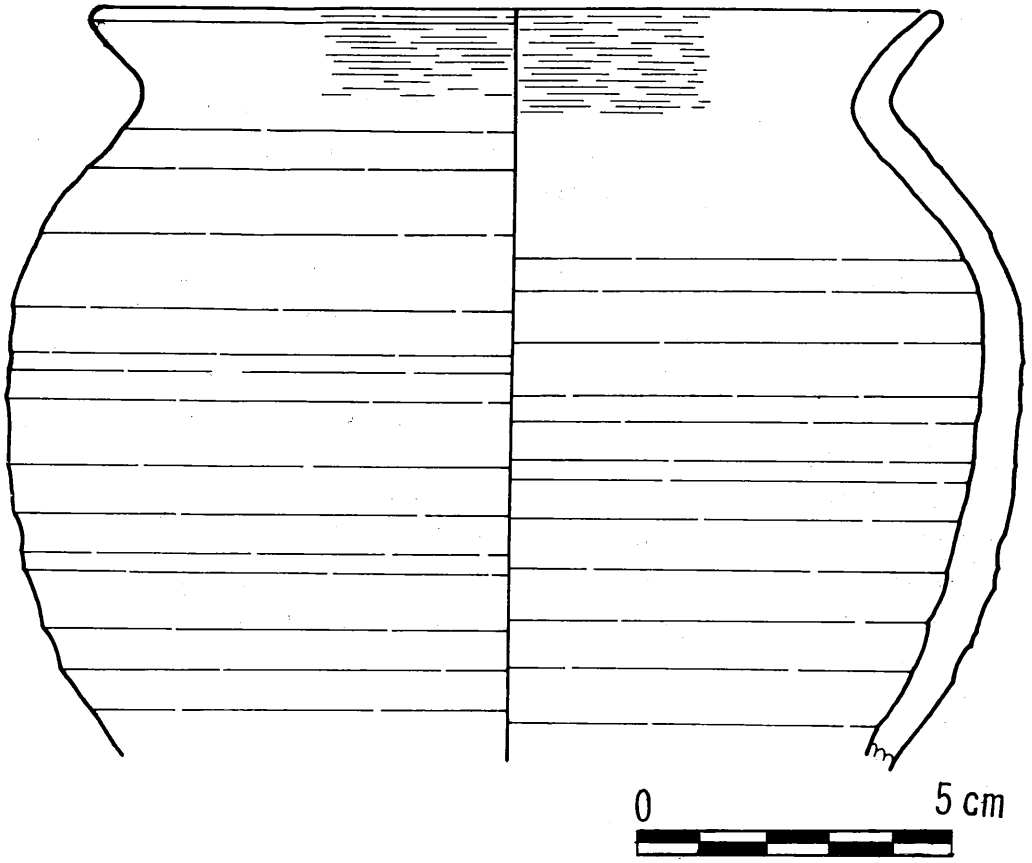
第1節　土　器

土器の説明は表を作成し，一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容説明を附記しておくことにする。胎土，保存状態，色調についての記述は明らかなる基準によったものではなく，筆者の主観によるものである。

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ	文様の特徴	備　考
7	1	多量の雲母	中　位	明褐色	8	縄　文	グリット
〃	2	少量の長石	中　位	黒褐色	7	沈　線	〃
〃	3	〃	〃	〃	5	〃	〃
〃	4	多量の雲母	〃		7	沈　線	〃
〃	5	〃	〃	黒褐色	5	爪形文，刻目 隆帯，沈線	〃
〃	6	少量の雲母	中　位	〃	6	爪形文，沈線，刻目	グリット 口縁部
〃	7	多量の長石	不　良	赤明褐色	7	沈線，刻目	グリット
〃	8	少量の長石	中　位	明褐色	7	刺突文 縄文，沈線	グリット
〃	9	少量の雲母	良　好	明褐色	6	沈線，刻目	グリット 口縁部
〃	10	〃	中　位	赤褐色	7	刻目，沈線	〃
〃	11	少量の長石	良　好	茶褐色	6	沈　線	グリット
〃	12	多量の長石	不　良	明褐色	7	沈　線	グリット
〃	13	少量の長石	〃	茶褐色	7	〃	〃
〃	14	多量の長石	良　好	赤褐色	6	沈　線 円形沈線文	グリット 口縁部
〃	15	多量の雲母	〃	〃	7	沈　線 内面に擦痕	〃

第2表　出土土器の形状一覧表（その1）

第14図の遺物は第1号住居址のカマド内より出土した土師器の小形甕である。色調は外面赤褐色内面黒褐色を呈し，微密な胎土の状態であった。外面は，二次的な焼成痕が顕著な面があった。口径13.0cm，胴部最大径15.8cm，最大径部は，胴部上半にあり，全体に丸い感じの甕である。薄手の土器で，器面の整形技法は，口唇から頸部にかけて内外面ともに横ナデ，胴部はロクロによる水引整形痕が内外面ともに顕著である。（田畑辰雄）



第14図　土器実測図

第2節　石　　器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版，番号，名称，器形，石質，備考である。

図版	番号	名　　称	器　形	石　質	備　考
8	1	砥　　石		油性頁岩	2号住宅址
〃	2	打製石斧	短冊形	硬 砂 岩	グリット
〃	3	〃	〃		〃
〃	4	〃	〃		〃
〃	5	磨製石斧	乳棒状	蛇 紋 岩	〃
〃	6	石　　錘		硬 砂 岩	〃
〃	7	〃		蛇 紋 岩	〃
〃	8	磨　　石		硬 砂 岩	〃
〃	9	〃		〃	〃

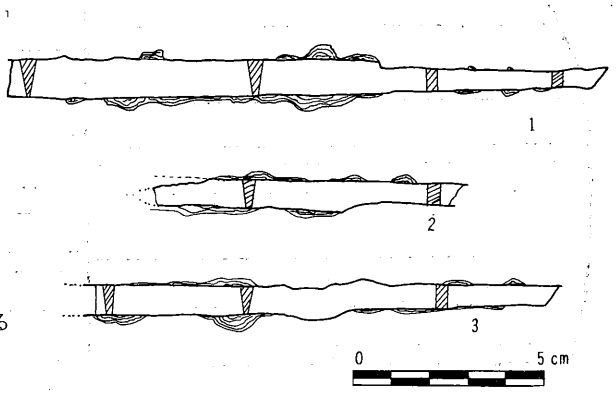
第3表　出土石器の形状一覧表（その1）

第3節　鉄　　器

第１５図に記された３個の鉄器は全て刀子である。第１号住居址の東壁近くの床面に密着して出土したものである。１は現長１5.7cm，２は 8.2 cm，３は１2.6 cmである。（1〜3）はいずれも柄の方は破損してしまっている。（1，3）は鋒者の残り状態は極めて良好であった。

刀子の腐蝕状態はかなり良好な状態であり，割合に刀身はしっかりしていた。鋒者は二つとも割合に鋭く，この部分には全く腐蝕の状態が見当らなかった。

刃先は割合になめらかであり，刀子としては上伊那地方としては，かなり優品のなかにふくまれるものと思われる。鉄は当然，時代からして砂鉄を使用したものと思われる。（小池政美）



第１５図　鉄器実測図

第Ⅴ章　まとめ

本遺跡の調査は，伊那市西春近沢渡地籍では初めてであった。そのために，いままで，未知な点が，多かっただけに，その解明に役立つものと期待して，調査にとりかかった。　発掘した成果をここに列記すると，住居址３軒，土拡８基，溝状遺構１である。住居址３軒の内訳は平安時代３軒である。各遺構についての本格的な考察は時間的余裕がないので，ここではいくつかの問題点を記し，所見を附しておきたい。

眼子田原遺跡は既述したように河岸段丘上の突端部地域，いわゆる，最も自然災害については安定した地帯，また，日照時間についても長い地帯，さらに段丘崖より出る湧水の豊富な地帯，これらの三つの自然的条件を備えており，遺跡地存在としては極めそ濃厚な場所であった。平安時代関係の検出遺構は竪穴住居址が３軒あり，これらは全て関東地方の国分期に比定されるものである。隅丸方形を呈し，カマドは西壁寄り中央部附近に石を並べ，その周囲に粘土をつけた石組粘土カマドであった。これらの３軒の住居址は平安時代中期初頭頃に位置づけられそうである。このころには灰釉陶器の存在が活発化してくるのに，本遺跡では一点も出土していない点は何か注目に価するだろう。しかし，ロクロの顕著な小型甕の出土からして，前述した時期に相違ないことは確証できよう。

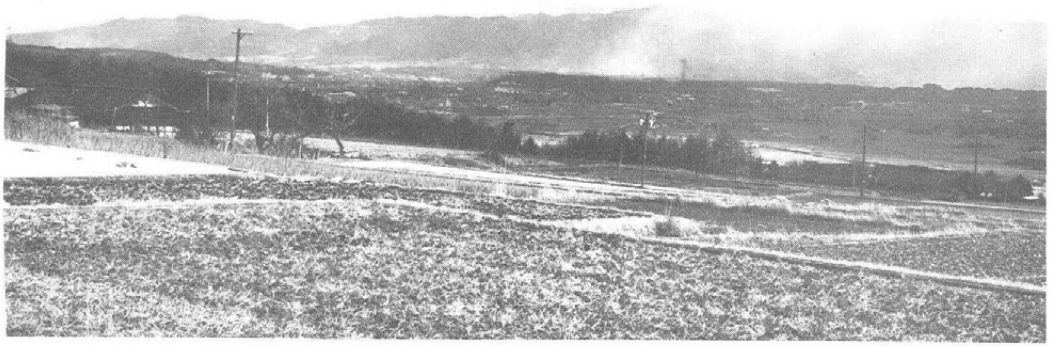
次に土拡について述べてみようと思う。土拡は８カ所発見されたが，全て，遺物の出土は何もなかったので，時代決定は不可能である。

溝址は水田の地場層の下に検出された遺構である。現在，水田に利用している眼子田井は遺跡地から西方へ３Km程登った地点で，犬田切川より引き水している。この井は江戸時代末期に開らかれたものである。今回，発見されたのは，どうも井の可能性が強い，おそらく，眼子田井の前時代の井であったのではなかろうか。

遺物は土器・石器・鉄器が出土している。土器については縄文時代中期のものが最も多く，そのなかでも編年で言う，梨久保式が多かった。石器は砥石，打製石斧，磨製石斧，石錘，磨石などの種類で，石質は油性頁岩，硬砂岩，蛇紋岩であった。　（小池政美）

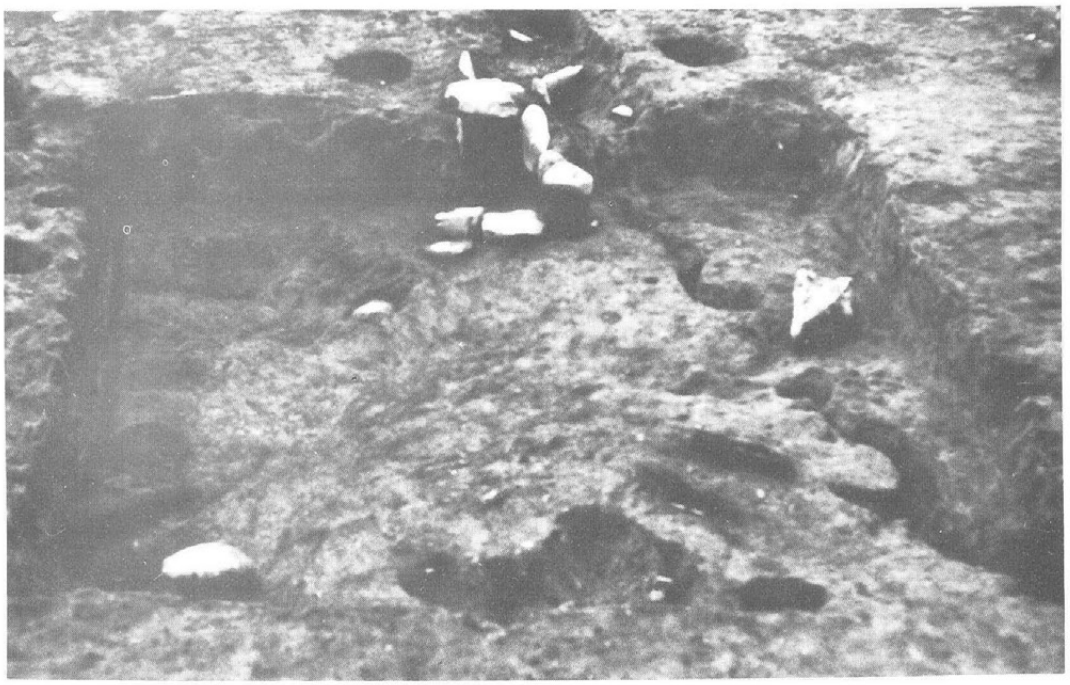
図　　版

竜東より遺跡地を眺む

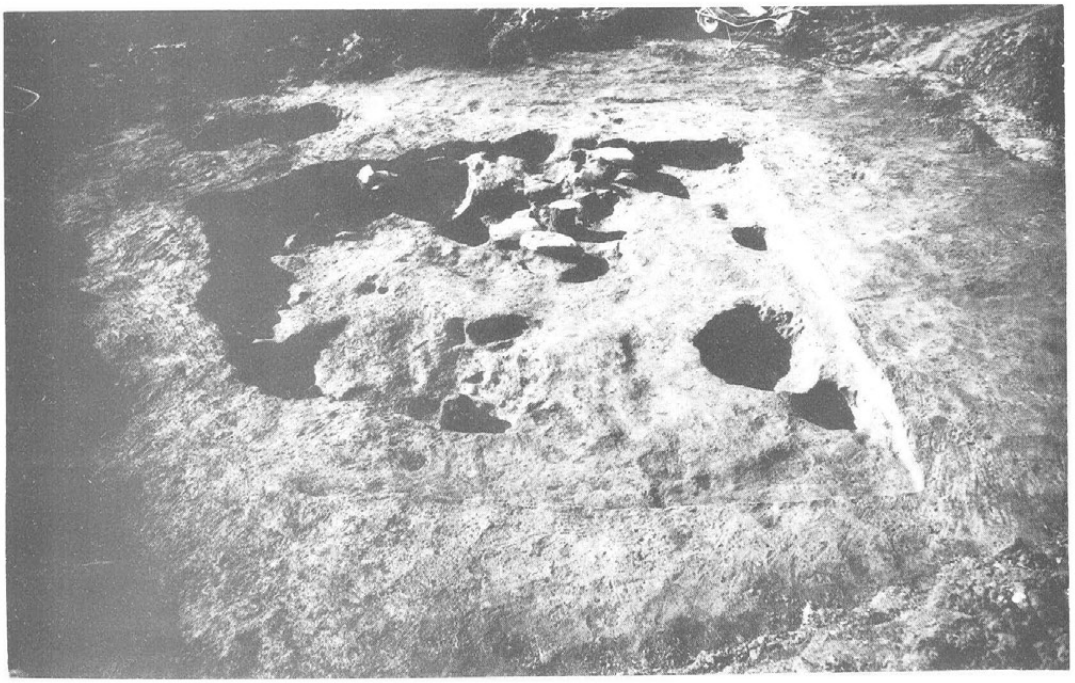


西側より遺跡を眺む

図版1　遺　跡　全　景

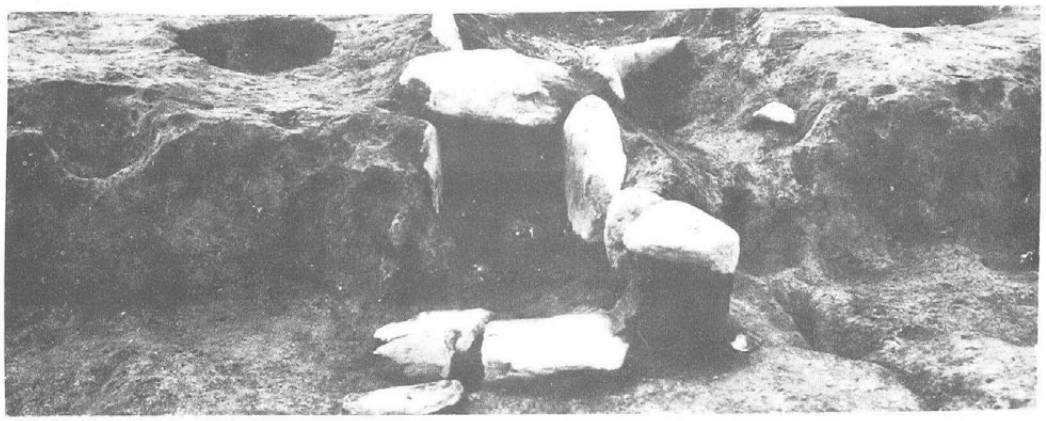


第１号住居址

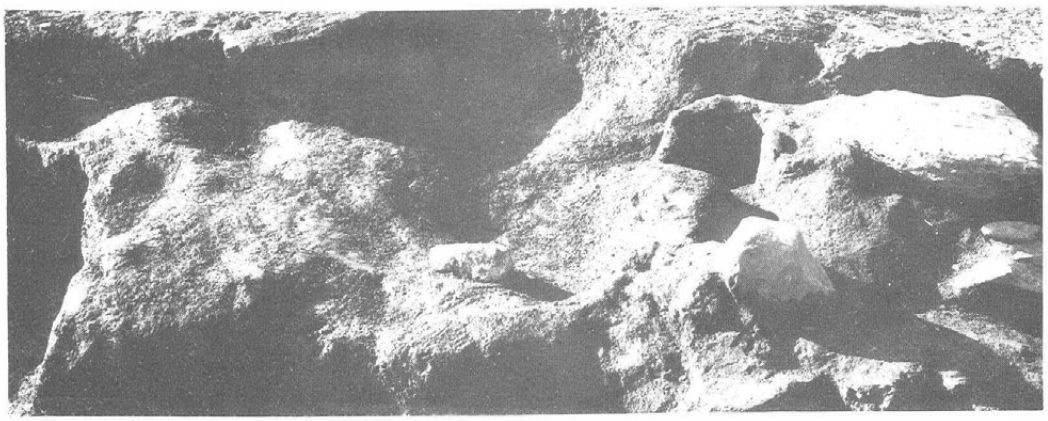


第２・３号住居址

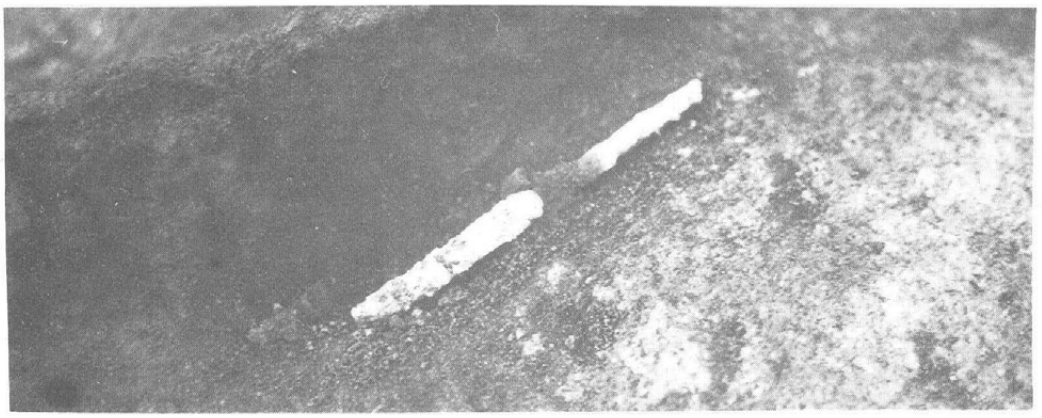
図版２　遺　　構



第１号住居址カマド



第２・３号住居址カマド



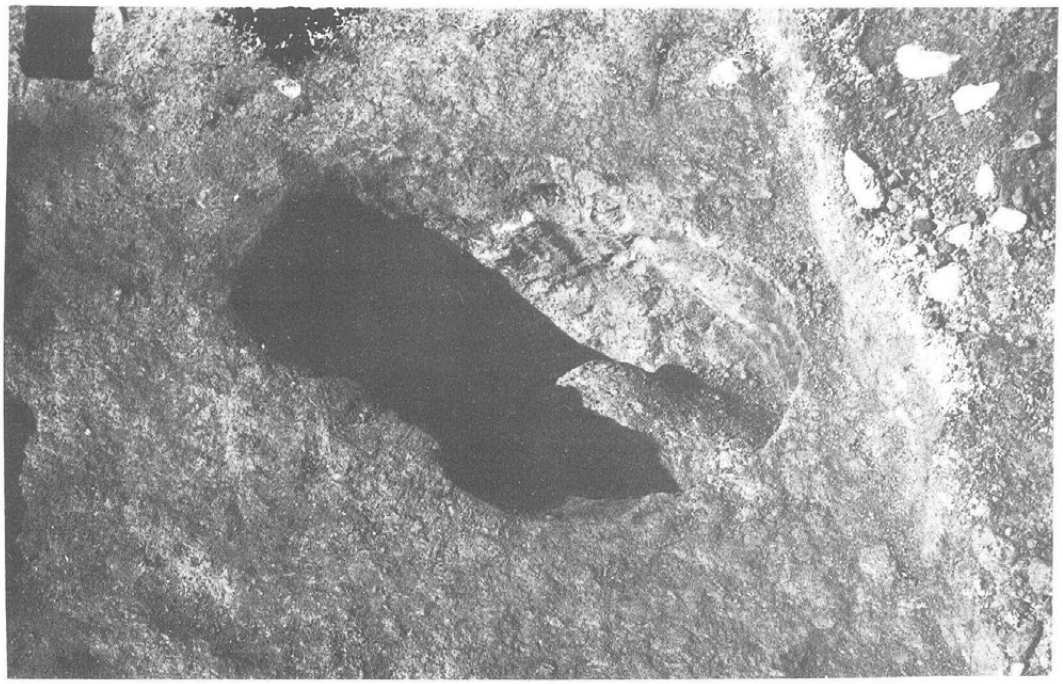
刀子出土状況（第１号住居址）

図版３　遺構及び遺物出土状況

第1号・2号土拡

第3号・4号・5号土拡

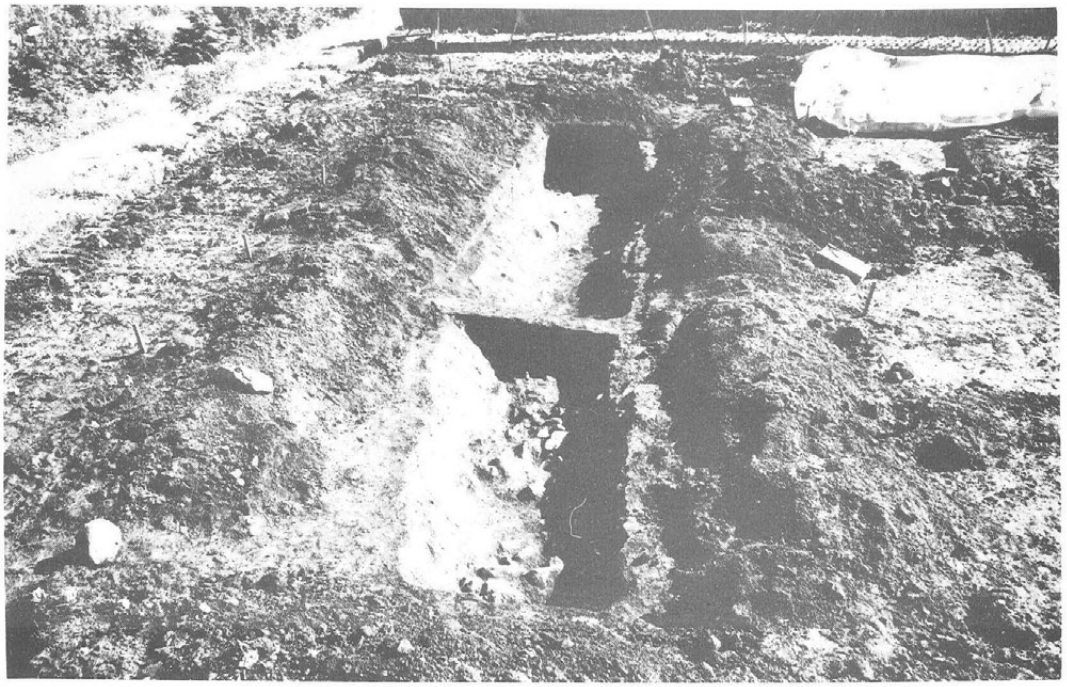
図版4　遺　　構



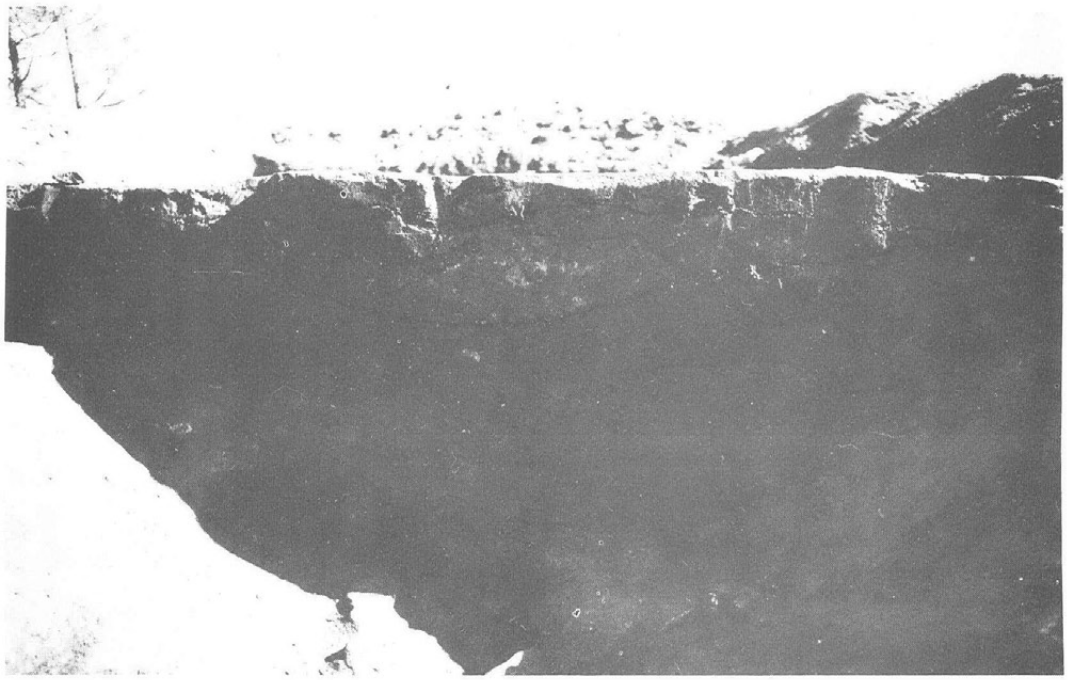
第6号土拡

第7号・8号土拡

図版5　遺　　構

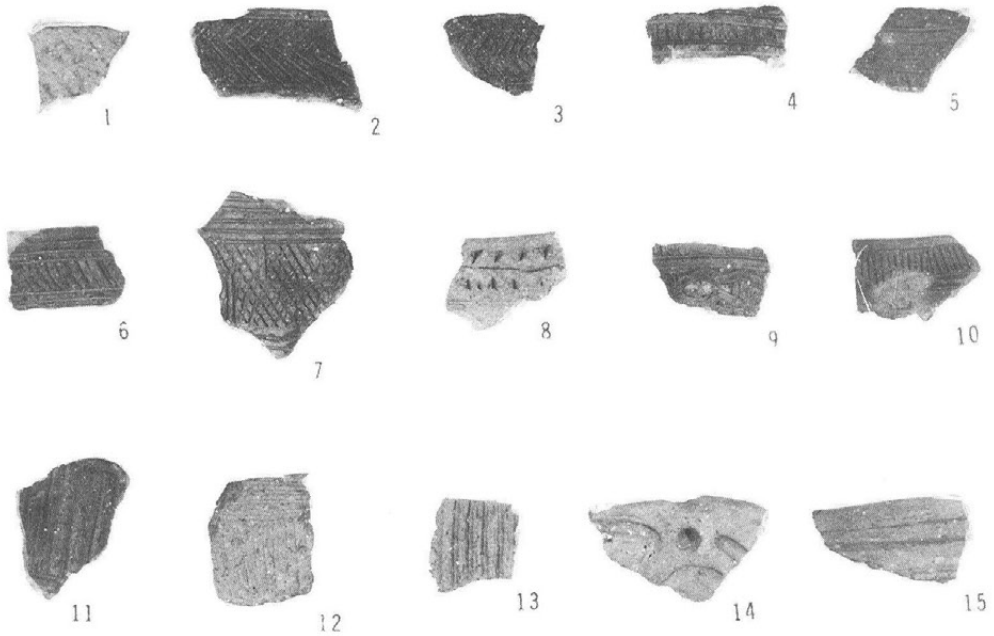


溝　　址

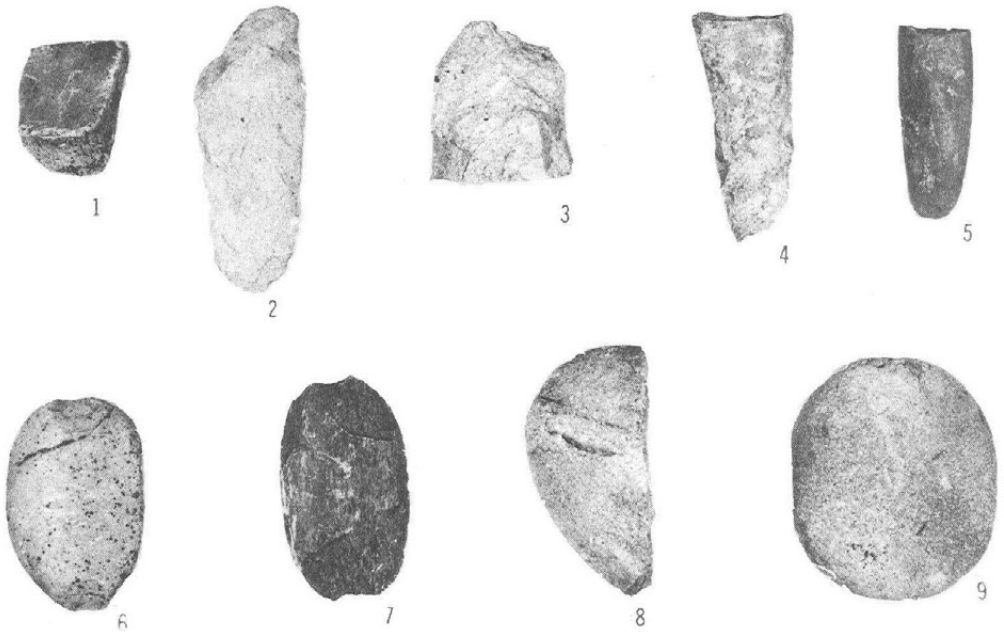


溝址断面図

図版6　遺　　構



図版 7　出土土器



図版 8　出土石器

眼子田原遺跡

―― 緊急発掘調査報告 ――

昭和52年3月15日　印刷

昭和52年3月25日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　長野県伊那市美篶上大島

みすず創美社